

RILAS 研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」および
「ヨーロッパ基層文化の学際的研究」主催ワークショップ 報告書

2018.1.27

朝河貫一の東アジア研究

主催：早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」「ヨーロッパ基層文化の学際的研究」

共催：私立大学戦略的研究基盤支援事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏－東アジアにおける人文学の危機と再生－」

日時：2018年1月27日（土）14:00-17:30

場所：早稲田大学戸山キャンパス 39号館 第7会議室

司会：甚野尚志（早稲田大学文学学術院教授）

報告：武藤秀太郎（新潟大学経済学部准教授）

「朝河貫一と中国歴史学－服部宇之吉との関連を中心に」

松谷有美子（清泉女子大学附属図書館司書）

「シュワブ艦長書簡類にみる朝河貫一のイェール大学図書館のための日本資料収集」

コメント：海老澤衷（早稲田大学文学学術院教授）

早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」および「ヨーロッパ基層文化の学際的研究」では、「朝河貫一の東アジア研究」というテーマでワークショップを開催した。

まず、武藤秀太郎氏が、「朝河貫一と中国歴史学－服部宇之吉との関連を中心に」という題目で報告された。服部宇之吉（1867-1939）は、朝河貫一と同郷であり、国際的に活躍した学者である。報告は、朝河が服部から少なからぬ思想的影響を受けていたことを明らかにするものであった。まず、これまで注目されてこなかった朝河貫一と服部宇之吉の手紙から、両者の交流について検討し、少なくとも服部が渡米する1915年までに両者に面識があったことが推測できることを指摘された。つづいて、服部の著した『孔子及孔子教』を参照しつつ、公羊伝を批判し、孔子の教えを純化しようとする服部独自の「孔子教」論を確認した。そのような服部の「孔子教」論を踏まえた上で、朝河

貫一の儒教論を分析し、特に『入来文書』に見られる日中比較に関する朝河の儒教観が、服部の説いた孔子教と類似したものであることを論じられた。報告の後、司会の甚野尚志先生からコメントがあり、質疑応答が行われた。

つづいて、松谷有美子氏が「シュワブ艦長書簡類にみる朝河貫一のイエール大学図書館のための日本資料収集」という題目で発表された。松谷氏は、イエール大学マニユスクリプト・アーカイブ部に収載された、朝河とシュワブ館長の間で交わされた書簡類について詳細な調査報告をされた。また、朝河が日本資料の収集を公式に表明した1907年から1908年にかけての『イエール大学図書館長年次報告』を精緻に分析、比較検討された。松谷氏の報告のあと質疑応答が行われ、引き続いてコメンテータの海老澤衷先生から「『大化改新の研究』から115年」という題目で報告がなされた。その後、会場全体でディスカッションがあり、盛況のうちに閉会した。

(記録：常田槇子)

